

書評と紹介

長谷正當著

『浄土とは何か』

——親鸞の思索と土における超越——

法藏館 二〇一〇年一〇月一〇日刊

A5判 vi+三一四頁 三八〇〇円+税

氣多雅子

本書は『欲望の哲学——浄土教世界の思索』（二〇〇三年）、『心に映る無限——空のイマジユ化』（二〇〇五年）に続く、長谷正當の浄土仏教研究の新たな成果である。近年の著者の旺盛な研究活動には眼を見張るものがあり、柔軟で瑞々しい思索力は衰えることを知らないようである。

本書は三部構成で十二編の論文からなり、浄土仏教における超越の問題を扱っている。現代では浄土の観念が宙に浮いた空疎な思念になっているという危惧から、「浄土とは何か」を改めて問い直すという趣旨が本書の題名にこめられている。その問い直しの底流にあるのは「浄土の観念の根源にあるのは、人間を含めて、あらゆる生きものが身体をもって土の上に生きているということの徹底した認識である」という洞察である。まず本書の内容を紹介しておこう。

第一部「浄土のイマジユ」では、著者の根本概念となっている「空のイマジユ化」という思想によって浄土の観念を理解するという視座が鮮明に打ち出されている。「空のイマジユ化」とは、目に見えない空が虚空に映って可視的になるという、西谷啓治が晩年の『空と即』で展開した考え方であると考えられる。第一論文「空のイマジユ化と無限の因果——浄土の莊嚴をめぐる——」は、世親が国土莊嚴、仏莊嚴、菩薩莊嚴の三種の莊嚴として描き出した浄土は、形なき「如来の心」が此土に反射して表した多様な形であり、「如来の清浄心（願心）のイマジユ化」であることを論じたものである。そしてさらに、浄土の莊嚴を支えている二つの根本原理の考察から、如来の心のイマジユ化である浄土の莊嚴が還相回向であることが示される。第二論文「報土としての浄土——冥福と幸福——」では、仏教に多様な浄土の観念があるなかで親鸞の語る真の浄土（報土）は信と結びつき、人々の怨恨や悪を内から浄化するはたらきをもつことが論じられる。日本の民間信仰における他界の観念との違いを明らかにして、仏教固有の死者儀礼の意義を説く著者の論考は、説得力に満ちている。第三論文「無量寿としてのいのちと信」では、無量寿といわれる「如来のいのち」とは私たちのいのちの内にはたらいっている無限の肯定の原理であること、宗教心とはこの如来のいのちが心の底に生じたことを意味するということが、そして、私たちは如来を私たちの欲生心の内に求めるべきであることが、論じられている。第四論文「宗教的生と「証」の世界」では、本願力の信において開かれるのは、煩惱を断じようとはせず煩惱を放置してその上を飛翔して

行く道であり、そのような信を自己の根幹において生きること
を親鸞は「現生正定聚」と呼んでいること、この「現生正定
聚」は曾我量深にならって「浄土を前方に見つつ、此土に止ま
ること」と解すべきであることが論じられる。

第二部「自己への問いと真宗」では、「自己」をめぐる著
者の浄土仏教理解はさらに深められる。第一論文「自己とは
何ぞや」という問いと真宗「自身を深信すること」では、自
己は主格(je)ではなく対格(me, moi, soi)において捉えら
れなければならないというリクールやレヴィナスの主張に導か
れて、「自身を深信する」とはどういうことが明らかにされ
る。第二論文「場所的論理と浄土真宗」では、西田幾多郎の場
所的論理的な宗教理解と曾我量深の宗学的な信の把握とを連関
させるなかで、浄土仏教の場所論的把握を探り、さらにはそこ
から宗教の場所論的理解を逆照射するということを著者は試み
ている。第三論文「曾我の思索と「分水嶺の本願」」は、曾我
量深の思索の特質を探究し、その還相回向の理解のなかに彼の
思索の真髓を読み取っていく論考である。第四論文「信と自己
同一の問題―バルト教授の疑問にたいして―」は、大谷大学
とマールブルク大学が「浄土真宗と福音主義神学」というテー
マで開催したセミナーでハンス・マルティン・バルト教授が
浄土仏教に対して提示した疑問に著者が応答した講演に基づい
ている。その疑問とは、ナザレのイエスと復活したキリストと
に同一化することによる自己同一性の獲得がキリスト教の出発
点であるのに対して、仏教とりわけ浄土仏教の出発点は何なの
か、というものであった。著者はここで、釈尊の正覚の出現と

いう歴史的出来事が仏教の歴史的出発点として特別な意義をも
っていることを主張するとともに、釈尊の説法を通じて阿弥陀
如来の本願が歴史的世界に入ってくると捉えることによって釈
尊の正覚の歴史的意義を自覚的にとらえるようになったのは仏
教の中でも浄土仏教であることを論じ、さらに宗教哲学から見
た自己同一性の問題を考察する。

第三部「無限の表現と回向の問題」は、宗教哲学的思索の核
心を確認しつつ、浄土をめぐる思惟を往相回向・還相回向の議
論へと収斂させてゆく論考である。第一論文「宗教哲学と自己
への問い」では、ヨアヒム・ワツハに表明されているような宗
教哲学は客観的知識の基礎となるようなリフェランスをもたな
い抽象的な学問であるとする見方に対し反論する議論を展開す
る。即ち、宗教を考察するリフェランスを自己に置くところに
日本の宗教哲学の固有性があり、浄土仏教の考察においてはそ
の自己を人間の有限性として追究するという特徴があると著者
は論じ、「現在における自己の身上」に宗教を問うという西谷
啓治の立場に共感を示す。この論考は宗教哲学に対する根強い
誤解への反駁となっている。第二論文「清沢の無限の因果にお
ける回向論」では、著者は清沢満之の自己論から考察を始め、
彼の「無限の因果」の考えを掘り下げてみることによって、そ
こから三通りの二重回向の理解を導き出す。第三論文「『教行
信証』と「回向」の問題」では、親鸞の『教行信証』のなかに
含まれている二重回向についての二つの理解が論じられ、それ
ぞれに問題点があることから両者を統合するような第三の理解
が提示される。第四論文「親鸞の還相回向の思想」では、これ

まで繰り返し論じられてきた二種回向の三つの理解が改めて詳細に論じられ、第三の統合的理解が親鸞の捉え方であることが主張される。

以上を概観すると、本書を一貫して流れる主題が二種回向であることは明らかである。「浄土とは何か」という問いが二種回向を主題として展開されることは、著者の浄土仏教理解の特質から説明できよう。著者は「浄土」を人間がそれを糧として生きる超越的生命、つまり如来のいのちがそこから流れてくる源泉であると捉え、如来のはたらきが衆生の世界に自らを映すということが「回向」の意味であると考え。それ故、「浄土とは何か」という問いは如来のはたらきが衆生の世界にどのように現れているかという問題に収斂してゆくと解される。二種回向をめぐる論考は本書の随所に現れ、明らかな議論の重複もある。それはいささか本書の構成のバランスを損なっている。とはいえそれが、この論題と全力で格闘する著者の思索の歩みを如実に読者に伝える結果ともなっている。

感性に訴求してくるような著者の瑞々しく軽やかな思索力がかねてから定評のあるところであり、本書には著者ならではの鋭い洞察が満ちている。これまでの著作に増して強く印象づけられるのは、本書に展開される思想世界のきわだった美しさである。そのひたすらな美しさは、自己と世界に対する無限の肯定性が著者の思索の隅々に行き渡っていることに由来するように思われる。それは、深い罪性の自覚を介して自らの根柢に浸透している無限との関係を感じし語り出してゆくというような

仕方である。著者の思索そのものがその体現となっているような肯定性である。怨恨や悪や苦痛もあくまで内から浄化され無力となったところから論じられ、ニヒリズムも既に克服されたところから語られて滞りが無い。この著者の立ち位置を支えているのが、「空のイメージ化」という考え方である。

著者は「空のイメージ化」を西谷啓治が晩年の『空と即』で展開した考え方であるとしているが、私の知るかぎり、西谷の著作にこの言葉は存しない。『空と即』に二つの部屋（AとB）とその仕切りの比喻に関係して「Aのimage化」という言葉は出てくるが、この言葉は回互的連関の特質を表すものであり、空をめぐる根源的事態を表すということとは少し異なっている。imageの語も、『空と即』に「イメージ」とカタカナ書きしている箇所もあるように、西谷のimageは英語のイメージであって、フランス語のイマージュではない。「イメージ」の語には著者のベルクソンやリクール、レヴィナスといったフランス哲学研究の蓄積が込められており、「空のイメージ化」はあくまで著者の思想であると考えるべきである。「言葉の周辺をめぐることをやめて、事柄をその内側から換骨奪胎的に捉える」のが浄土仏教に対する本書の態度であるが、この態度の基盤となっている「空のイメージ化」という考えそのものが著者による西谷の思想の換骨奪胎の成果なのである。

著者が京都大学で師事した武内義範は「夜、部屋の中であかりの下で書見をしている人があるとすると、私はその部屋の窓の外でそのあかりをたよりに落とし物を探している者に似ている。私の立場は、その部屋から来るあかりを借りて、自分自身

の問題をさぐっているということになる」（著作集第二巻、四七頁）と述べているが、それかというと、著者は部屋の中のあかりの下で書見している人である。おそらく著者にとっては、部屋の内と外という区別そのものが無意味であろう。部屋の内と外の区別は、外にいる者にとってこそ意味をもつからである。

だが、西田幾多郎も田邊元も西谷啓治もやはり窓の外で探し物をしていた人たちなのではないかと私は思う。その限りでは、私は京都学派の宗教哲学について著者とは考え方を異にする。

しかし、「私にとつては、そのあかりをたよりに外のものが拾えればそれで満足である。さらに何かの都合で、好意からかあるいは偶然にか、中の人が窓を少し開いて私の物探しを助けて下さるならば、それは私にとつて非常にありがたいことである」という武内の言葉に私は全面的に共感する。窓の外で探し物をする者にとつて、部屋のあかりの下で書見している人こそ自分の在処を確かめるよすがである。現代世界で部屋のあかりの下で書見している人がどれほど稀有な存在であるかを考えると、著者の著作のかけがえのなさを痛感する。

このようなことを言うのは、本書の実質的な主題となつている二種回向は、部屋の中でこそ有意味に語り得る問題だからである。（ちなみに部屋の中というのは、決して教学や神学の立場を指すのではない。）二種回向の三つの理解のうちどれが正しいかということについて論理的根拠というべきものはなく、むしろいずれの理解も正しいと言つてよい。考察的となすべきなのは、三つの理解の論理的妥当性ではないのである。三つの理解のいずれにも自己自身の体験的事実に基づいた重い必然

性があり、考察されるべきであるのはその必然性である。著者はその必然性の内から直接に語り出される言葉を聞き取りつつ、いわば透明となつた自己自身の根柢にそれらの言葉を反響させてゆくことによつて、第三の統合的理解の卓越性を説得的に提示する。

二種回向のうち、特に問題となるのは還相回向の理解である。著者は、如来のはたらきが広く種々の形をとつて、衆生の歴史的世界の隅々にまで出現してくるという事実を、親鸞の語る還相回向のうちに見て取る。そして、浄土の莊嚴とは、人間の住む国土において、人間の社会環境において、さらに人と人との間において、如来の清浄心がその影を映した姿であると理解する。そこから、如来の清浄心が衆生の世界にさまざまな形をとつて出現してくる運動と、その多様な莊嚴を通してその根源にある一なる如来の清浄心に触れてゆく運動という二つの運動の転展相入として、還相回向と往相回向を包括的に捉えるのである。これが著者の示す第三の統合的理解である。人間の世界における如来の清浄心の出現という事実から語ることが、部屋の中にあるのでなければなし得ないことである。この統合的理解が説得的であるのは、それが人間と世界の最も美しい理解だからである。この美に至るには我々は何を棄てなければならぬのか、この書はその問いを我々に突きつけてくる。